



ラムサール条約湿地
おくにっこう 奥日光の湿原

かんきょうがくしゅう
環境学習ハンドブック

学校名	学校
年 組	年 組
し 氏 めい 名	

し みんかんきょう ぶ かんきょう か
日光市市民環境部環境課

戦場ヶ原のワタスゲ

1 はじめに

「奥日光の湿原」は、日光市の北西部に位置し、登録面積は260.41ha、条約の湿地区いきは火山のふん火でせき止められてできた湯ノ湖と、そこから流れ出す湯川、流いきの戦場ヶ原と小田代原の2つの湿原で構成されています。2005年（平成17年）11月8日に、国際的に重要な湿地であることがみとめられ、ラムサール条約湿地に登録されました。

ラムサール条約とは、渡り鳥や魚など、いろいろな生き物がすめるような湿地を守るための条約のことで、環境に関係する国際的な条約としては最も古いものです。このラムサール条約に登録されたので、「ラムサール条約湿地」とよばれています。

このハンドブックは、「奥日光の湿原」について調べたり、体験したりして、わたしたちにできることを考えていくために作られたものです。大いに活用し、安全で楽しい観察ができるようにしましょう。

※ラムサール イランのラムサールで国際会議が開かれ、ラムサール条約が生まれました。

日光市市民環境部環境課

2 目次

ラムサール条約湿地の目的	3
日光市のしょうかい	4-6
ラムサール条約湿地「奥日光の湿原」	7・8
奥日光の地いき	9
保全の取り組み	10・11
「奥日光の湿原」ハイキングマップ	12・13
湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られる植物	14-17
湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られる野鳥	18
湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られるほ乳類・昆虫	19
調べてみよう	20
調べたことをまとめよう	21
学習のまとめ	22

3 ラムサール条約の目的

湿地は、多くの生き物を育てはぐくみ、人間の暮らしにたくさんのめぐみをあたえてくれるものです。ラムサール条約は、湿地の「保全」と「賢明な利用（かしこく使うこと。英語でワイズユースといいます。）」を目指しています。

日本はラムサール条約に1980年（昭和55年）に加盟し、奥日光の湿原、渡良瀬遊水地など、2015年8月現在、全国で50カ所の条約湿地があります。

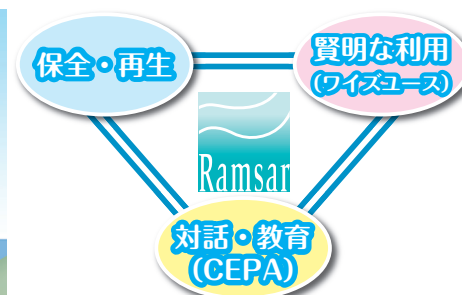
湿地の保全

人や生き物にとってかけがえのない大切な湿地を、重要な湿地としてみんなで協力して守り、大切にしていこうことを目指します。

賢明な利用（ワイズユース）

きびしく規制して湿地を守っていただくではなく、湿地の生態けいをいしつつ、そこから得られるめぐみを活用していくことを目指します。

ラムサール条約湿地イメージ



保全・再生	清そう、外来植物除去、木道の整備など
賢明な利用 【ワイズユース (wise use)】	自然環境を活かした観光や体験学習など
対話・教育 【CEPA※2】	参加した人々によるワークショップ、環境学習など

※2 C=Communication（広報）
E=Education（教育）
P=Participation（参加）
A=Awareness（ふきゅうけい発）

4 日光市

日光市は、栃^{とち}木^ぎ県の北西部に位置し、北は福^{ふく}島^{しま}県、西は群^{ぐん}馬^ま県に接し、東京から、日光市役所までは約120kmはなれています。広さは1,449.83㎢で、栃木県の約4分の1をしめ、全国でも3番目の広さです。市は、2006年(平成18年)3月20日に、今市市、日光市、塩^{しお}谷^や郡^{ぐん}藤^{ふじ}原^{はら}町、上^{かみ}都^つ賀^が郡^{ぐん}足^{あし}尾^お町、塩^{しお}谷^や郡^{ぐん}栗^{くり}山^{やま}村の5つの市町村が合わさって生まれました。

江戸時代、市の大部分は、江戸幕府が支配していました。この地いきでとれたお米などは、日光東照宮や輪王寺などにおさめられていたので、日光神領とよばれていました。

(社会科副読本「わたしたちの日光市」より)

日光市のように

福島県

北

1926m 田代山
2080m 帝釈山
2141m 鬼怒沼山
2330m 根名草山
1849m 手白山
2578m 白根山
2144m 龍海山
1892m 庚申山
1442m 赤倉山
1272m 備前権山
1272m 備前権山
1272m 備前権山

日光国立公園

日光地いき

栗山地いき

足尾地いき

今市地いき

那須塩原市

矢板市

塩谷町

宇都宮市

鹿沼市

0 10 km

2000 m
1500
1000
400
0

日光市

◆今市地いき

え ど にっこうとうしんどう かいどう れいへい し
江戸時代に日光東照宮が建てられると、おまいりのために三街道（日光街道、例幣使街
道、会津西街道）が整備されました。徳川家康の近臣であった松平正綱によって、20年
以上の年月をかけて、約20万本の杉が植えられ、日光東照宮に寄進されたことによって
「日光杉並木街道」が誕生しました。この街道は、国際観光文化都市「日光」にいたる三
街道からなり、総延長37km
もある並木道です。古いもの
は樹齢380年を超える杉の
巨木が約12,500本も連なる
壮大な並木で、日本でひとつ
だけ、特別史跡と特別天然記
念物の二重指定を受け、ギネ
スブックにも世界最長の並木
道としてけいさいされている
貴重な文化遺産です。



空からみた今市地いき

◆日光地いき

日光地いきは信こうの山として栄え、江戸時代、徳川家康は、自分の墓を築く場所として日光を選び、家康の死後、そのゆい言ごんごによって家康を守るために日光東照宮が建てられ、信こうの山として栄えてきました。大正から昭和初期にかけ、中禅寺湖ちゅうぜんじこはんには外国人の別荘が建ちならび、国際的なひ暑地こくさいきしよとなりました。また、昭和の始めには日光国立公園の指定を受け、観光地としての整備が進み、1999(平成11)年12月、日光の豊かな自然と調和した歴史文化財としての日光東照宮、日光山輪王寺、日光二荒山神社にっこうふたあらかんじんじやの二社一寺が、世界文化いさんに指定されました。



しょうどうしょうにんぞう
「勝道上人像」(輪王寺)

◆藤原地いき

江戸時代は、会津はん領、宇都宮はん領、日光神領と3つに分かれていました。鬼怒川と男鹿川に沿った会津西街道の宿場町として開け、江戸時代に鬼怒川温泉と川治温泉が発見され、湯治場としてホテルや旅館が整備され、全国からたくさんの人がおとずれます。



むかしの鬼怒川温泉のようす

◆足尾地いき

江戸時代に足尾銅山が発見され、銅がたくさんとれましたが、そのあと、生産がへっていきました。明治時代になって、古河市兵衛が銅山を買いとり、つぎつぎと新しい技術を取り入れたのでたくさんとれるようになりました。



銅がたくさんとれていたころのせいれん所の様子

◆栗山地いき

平安時代末期に源氏との戦いに敗れた平家の一部の人がにげかれすんだ「落人の里」であるという伝説がのこっています。湯西川温泉、川俣温泉、奥鬼怒温泉が発見され、「伝説と秘湯の里」として全国からたくさんの人がおとずれます。



平家の里

5 ラムサール条約湿地「奥日光の湿原（おくにっこうのしづげん）」



位置：北緯36度47分、東経139度26分

標高：湯ノ湖1,475m、戦場ヶ原1,400m、小田代原1,410m

面積：湯ノ湖35.71ha、湯川5.3ha、戦場ヶ原174.68ha、小田代原44.72ha

湿地のタイプ：高層湿原、中間湿原、淡水湖

「奥日光の湿原」面積260.41ha（東京ドーム約56個分）

○湯ノ湖.....

三ッ岳のふん火によってできたせき止め湖です。水深は最大でも14.5mと浅く、北岸は温泉がわきでるので、冬でも凍らず、冬はマガモ、ヒドリガモなどの水鳥が飛来します。



○湯川.....

湯ノ湖の水が湯滝となって流れ落ち、戦場ヶ原を通して、中禅寺湖へと注ぐ川です。

全長は11.2kmと短い川ですが、ゆったりと流れる独特の景しきは本州でもき重なもの。登録区いきは流いきすべてではなく、湯滝から戦場ヶ原横までの区間です。



○戦場ヶ原

男体山のふん火によって川がせき止められてできた湿原で、登録区いきは国道の西側です。

湿原はミズゴケが厚く積もった高層湿原、水がたまっていて栄養分に富んでいる低層湿原、その中間の中間湿原がそんざいし、ワタスゲ、レンゲツツジ、ホザキシモツケなど、多くの湿原性の植物が生育しています。



夏の戦場ヶ原



戦場ヶ原のホザキシモツケ



秋の戦場ヶ原

○小田代原

戦場ヶ原のとなりにあり、湯川の西側に広がる周囲2キロの草原です。かんそう化が進み、湿原から草原に移行するだん階といわれています。アヤメ、ノハナショウブ、ノアザミなどの多くの植物が生育しています。



小田代原のノアザミ

○奥日光の地いき

2万年前の戦場ヶ原は、日光火山群のふん火でせき止められた湖だったといわれています。かんそう化、土しゃの流れこみ、さらには男体山のふん火により軽石流が流れこんで、いまの湿原の姿にかわったといわれています。

奥日光は、日光市役所からさらに約30km西北にあり、標高は1,269m（中禅寺湖周辺）から2,578m（日光白根山）と、土地の高さにちがいががあります。気温は夏でも30℃をこえず、冬はマイナス20℃近くまで下がります。そのため、寒冷地に適応した植物や動物が見られます。

植物には、日光地方の地名を付けた植物「ニッコウアザミ」「ユモト（湯元）マムシグサ」などが約46種類あります。こん虫がたくさん生息し、戦場ヶ原や小田代原でしか見られない「フタスジチョウ」がいます。野鳥も多く、「ノビタキ」「オオジシギ」「ウグイス」「ホトトギス」などが見られます。ほ乳類では、「ツキノワグマ」「ニホンジカ」「ニホンザル」などが生息しています。

奥日光の歴史「ムカデとヘビの戦い～戦場ヶ原の伝説～」

むかしむかし、上野ノ国（群馬県）と下野ノ国（栃木県）のさかいが、まだはっきりきまっていなかったころのお話です。美しい山の上の湖、中禅寺湖を見た上野ノ国の赤城山の神様は、中禅寺湖はわたしのものだ、と言い出しました。もともと、中禅寺湖は自分のものと思っていた、下野の二荒山（男体山）の神様は、赤城の神様の話をうけつけませんでした。どうしても中禅寺湖のほしい赤城の神様は、たくさんの百足の兵隊を引きつけ、金精峠をこえて、今の湯元まで攻めこんできました。

二荒の神様は、たくさんのヘビの兵隊をくり出し、湯元と中禅寺湖の間の広い原で、百足軍をむかえうちました。戦争は勝ったり負けたり、いく日もいく日も続きました。きれいな花の咲きみだれていた美しい草原は、きずついた両軍の流した血で、まっ赤にそまりました。

赤城の百足軍は弓がじょうずで、二荒の蛇軍は、片目を射られる者が多く出ましたが、それでもひるまず、勇ましく戦いました。戦争はいつ終わるのか、まったくわかりませんでした。

ちょうどそのとき、白根山がふん火して、大ばく発をし、ちょう上が二つにわれたのです。

長い戦争につかれた両方の神様は、中禅寺湖の砂浜で仲なごりの会議を開き、白根山のちょう上のわれ目を、上野と下野の国ざかいときめました。（中略）

会議をした中禅寺湖の砂浜は、勝負がきまった所ということで、勝負ヶ浜とよばれました。（今は菖蒲ヶ浜と書く。）そして、両軍の戦場となった広い原が、戦場ヶ原となりました。戦場ヶ原の赤沼は、きずついた両軍の兵隊が流した血でまっ赤になったのでそうよばれました。

戦場ヶ原には、ときどき片目のつぶれた蛇が出るといわれています。それは、赤城軍に目をうちぬかれた蛇の“子孫”だということです。

（八木沢亨著「子どものための日光のむかしばなし」～戦場ヶ原～1987年（昭和62年）3月発行）

6 保全の取り組み

「奥日光の湿原」は、ゆう大な山々に囲まれ、豊かな自然と、美しい景色にめぐまれています。そこには、多くの野鳥がおとずれ、たくさんの動植物が見られます。

「奥日光の湿原」は、全いきが日光国立公園に指定されており、自然公園法によって保全が図られています。そのなかでも「奥日光の湿原」は、最も規制のきびしい「特別保護地区」や「特別地いき」に指定されています。

奥日光の自然を守るため、湿原の中を歩くための木道（人が歩けるようになっている木でできた道）の整備や低公害バスが運行されています。国、県、市や、自然保護活動のグループ、ボランティアなど、たくさんの人が保全活動の取り組みをしています。一人ひとりが「美しい自然を守っていこう」という気持ちで、外来植物のかりとりやゴミ拾いなどの取り組みをしていくことによって、「奥日光の湿原」が守られています。



戦場ヶ原の木道



「オオハンゴンソウ」かりとり



「コカナダモ」かりとり



クリーンハイキング

～ハイキングのマナー～

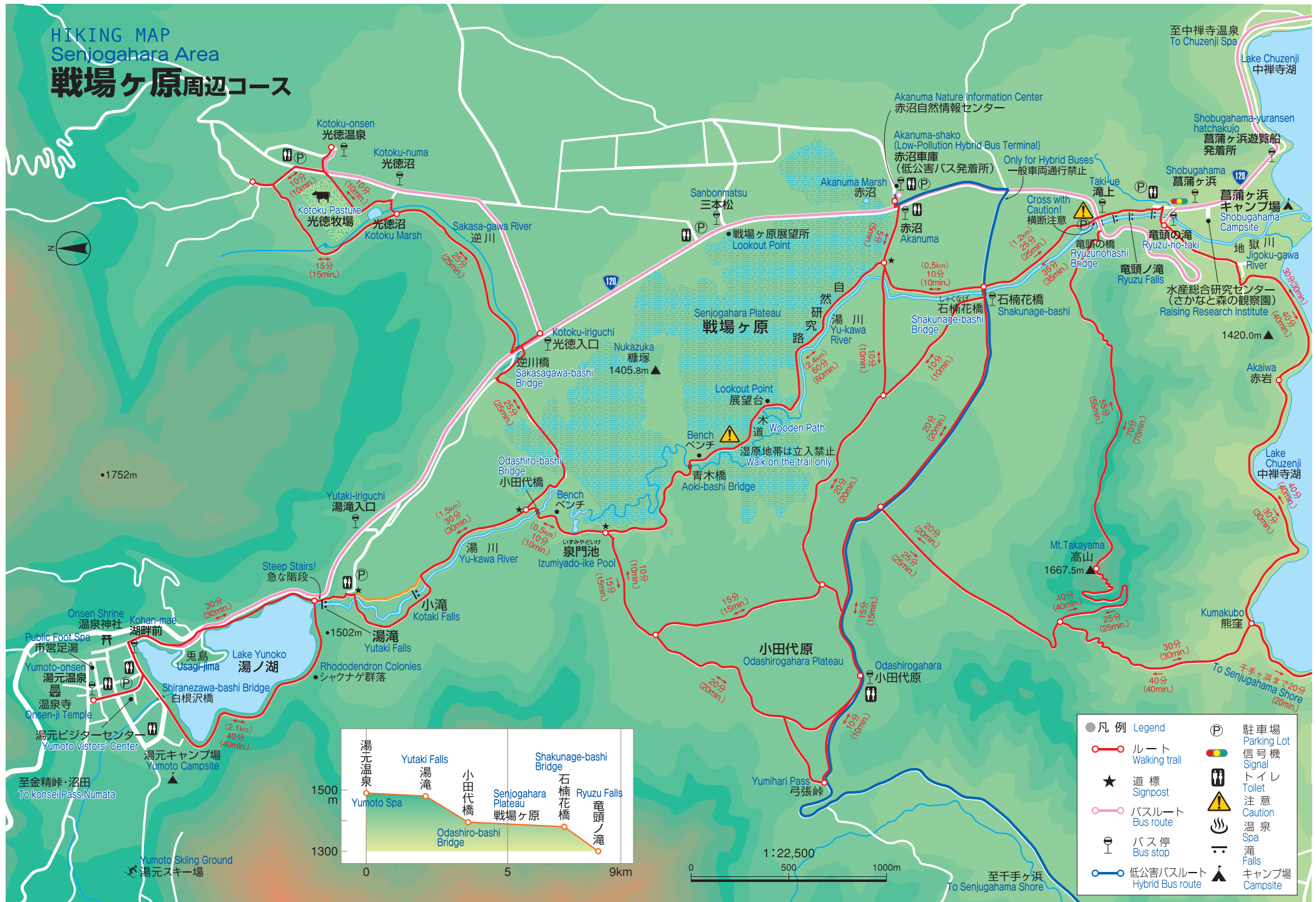
- ごみは持ち帰りましょう。
- 野生動物にえさをあたえないようにしましょう。
- 野生の動物や植物、落葉、小石などの自然物を採取したり、地いき外に持ち出したりしないようにしましょう。
- オオハンゴンソウやハルザキヤマガラシなどの外来種が移入種として問題になっています。その地いきにない動物や植物を持ちこまないようにしましょう。
- ペットを持ちこまないようにしましょう。
- 道路・歩道や決められた場所以外は立ち入らないようにしましょう。
特に木道は、右側通行が原則で、走らないようにしましょう。
- 木道からは絶対におりないようにしましょう。
- 歩く際にはあいさつも大切なマナーですが、団体の全員があいさつするのはかえって迷わくなります。何人かがあいさつし、後はおじぎ程度にするなど、相手を気づかうことがマナーの基本です。静けさも大切な自然の一部です。
- 地いき内でそう音（大声、カーステレオ、ラジオ、エンジン音など）を出さないようにしましょう。
- トイレは決められた場所でしましょう。

～木道～

湿原を保護するために
木で作った道です。
そのため、木道の下に
おりないようにしましょう。

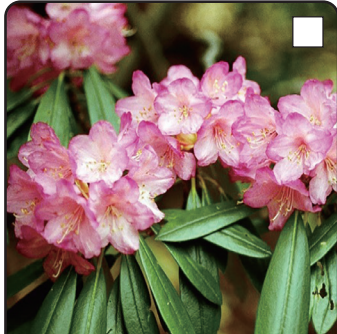


HIKING MAP Senjogahara Area 戦場ヶ原周辺コース



湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られる植物

奥日光の湿原で見ることができる代表的な植物、野鳥、ほ乳類、昆虫です。
見つけたら□に印をつけて気がついたことを書き込んでおきましょう。



アズマシャクナゲ (ツツジ科)
花期 5月中旬～6月上旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
湖はんに群生している



ユモトマムシグサ (サトイモ科)
花期 5月下旬～6月中旬
場所 湯ノ湖
日光湯元の地名から名づけられた



クロミノウグイスカグラ (スイカズラ科)
花期 5月下旬～6月上旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
夏に黒っぽい実をつける



ズミ (バラ科)
花期 6月上旬～中旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
湿原の乾燥化により増加している樹木



ワタスゲ (カヤツリグサ科)
果期 6月上旬～下旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原
花の後の白い綿毛をつけた果穂が目立つ



シウリザクラ (バラ科)
花期 6月上旬～中旬
場所 湯ノ湖
小さい花がブラシ状にたくさんつく



アヤメ (アヤメ科)
花期 6月中旬～7月上旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
花びらにあみ目ようがある



レンゲツツジ (ツツジ科)
花期 6月中旬～7月上旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
湿地に多く生育するツツジの仲間



ウマノアシガタ (キンボウゲ科)
花期 6月上旬～7月中旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
つやのある花びらが特徴

MEMO



カンボク (スイカズラ科)
花期 6月下旬～7月中旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原
秋には赤い実をたくさんつける



ハクサンフウロ (フウロソウ科)
花期 6月中旬～8月下旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
戦場ヶ原・小田代原の代表種で花期が長い



ツルコケモモ (ツツジ科)
花期 6月下旬～7月下旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原
秋には赤い実をつける



バイケイソウ (ユリ科)
花期 7月中旬～8月上旬
場所 戦場ヶ原
背が高くウメに似た花をたくさんつける



ノハナショウブ (アヤメ科)
花期 7月上旬～下旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
花びらにあみ目もようがない



マンセンカラマツ (キンボウゲ科)
花期 7月中旬～8月上旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
花がカラマツの葉に似ている



モウセンゴケ (モウセンゴケ科)
花期 7月中旬～8月上旬
場所 戦場ヶ原
粘り気のある毛で虫をとる食虫植物



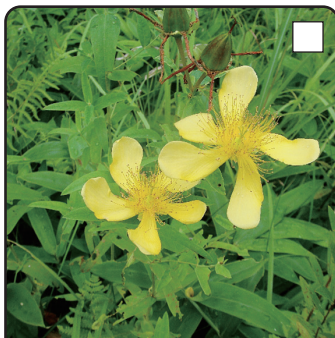
ミスチドリ (ラン科)
花期 7月中旬～下旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
水鳥のチドリに似た花をたくさんつける



ホザキシモツケ (バラ科)
花期 7月上旬～9月上旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
戦場ヶ原・小田代原を代表する低木



クガイソウ (ゴマノハグサ科)
花期 7月下旬～8月上旬
場所 小田代原
葉が何段にも重なリクガイは9階の意味



トモエソウ (オトギリソウ科)
花期 7月下旬～8月中旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
花びらが巴(ともえ)状にねじれる



コオニユリ (ユリ科)
花期 7月中旬～8月下旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
湿ったところを好むユリの仲間



ノアザミ (キク科)
花期 7月中旬～8月下旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
長い茎の先に1個の花をつける



ニッコウアザミ (キク科)
花期 7月下旬～9月上旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
茎の先に数個の花をつける



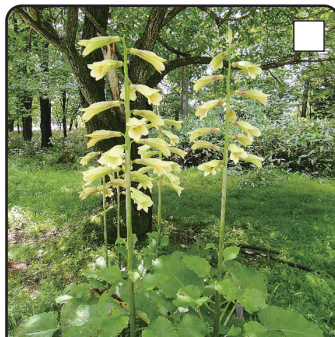
チダケサシ (ユキノシタ科)
花期 7月下旬～8月中旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
きのこのチチダケを刺して持ち帰った



イブキトラノオ (タデ科)
花期 7月上旬～8月中旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
花の穂をトラの尾に見たてた



ノリウツギ (ユキノシタ科)
花期 7月中旬～8月中旬
場所 湯ノ湖
むかしは樹皮を和紙をすくノリに使った



オオウバユリ (ユリ科)
花期 7月下旬～8月上旬
場所 湯ノ湖・小田代原
横向きの花をたくさんつける



キオン (キク科)
花期 7月下旬～9月上旬
場所 小田代原
オンはキクのごとで黄色いキクの意味



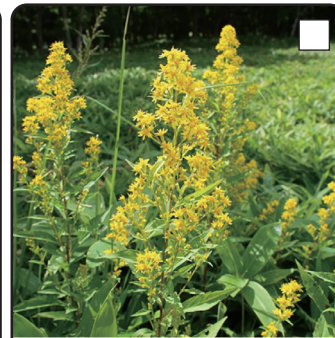
シロヨメナ (キク科)
花期 8月上旬～10月上旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
シカが食べないのでふえている



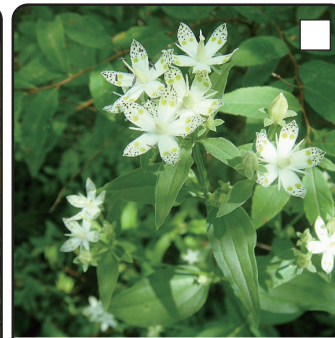
クサレダマ (サクラソウ科)
花期 8月上旬～下旬
場所 戦場ヶ原・小田代原
レダマという木に似た草という意味



エゾリンドウ (リンドウ科)
花期 8月上旬～9月上旬
場所 戦場ヶ原
先端と葉のつけ根に花を数段つける



アキノキリンソウ (キク科)
花期 8月上旬～9月下旬
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
秋を代表する草原の植物



アケボノソウ (リンドウ科)
花期 8月中旬～9月上旬
場所 戦場ヶ原
花びらの点々を夜明けの星空に見たてた



ウメバチソウ (ユキノシタ科)
花期 8月下旬～9月下旬
場所 戦場ヶ原
花を家紋のウメバチ紋に見たてた



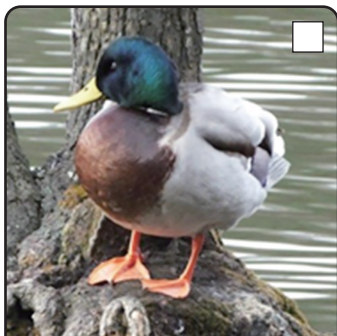
シラカンバ (カバノキ科)
場所 湯ノ湖畔・戦場ヶ原・小田代原
シラカバとよばれ、冷涼で日当たりのよいところを好む(日光市の木)



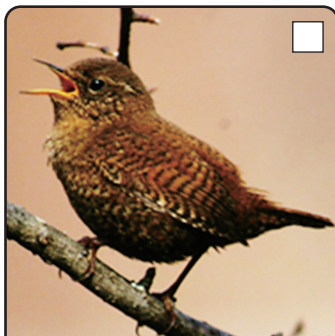
ミズナラ (ブナ科)
場所 湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原
大きな林をつくる樹木で秋に実るドングリは動物への恵みとなる

湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られる野鳥

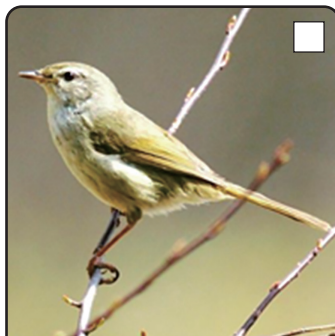
MEMO



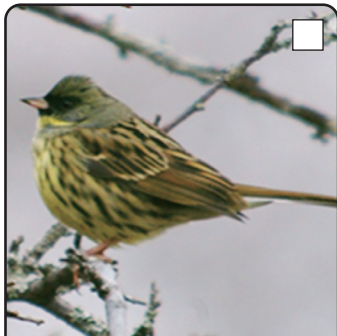
マガモ (カモ科)
湯ノ湖・湯川で1年中見られる。
マガモが日本でヒナを育てる数少ない
場所である。カモの代表種



ミソサザイ (ミソサザイ科)
水辺の木の根元などに巣をつくり、冬は
平地です。体は小さいがさえずりの
声はおどろくほど大きく長い



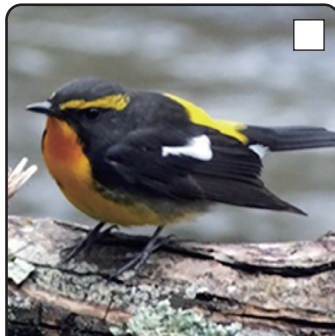
ウグイス (ウグイス科)
地上1〜2mのササやかん木の中でヒナ
を育て、冬は平地です。ホーホケキョ
と鳴くので知られている



アオジ (ホオジロ科)
戦場ヶ原を代表する鳥。高さ数mのズミや
カラマツの梢でチョッピンチュルリーと
のどかにさえずる。冬は平地です



ホオアカ (ホオジロ科)
草原の中でヒナを育て、冬は平地です。
にこった声でチョッチチチとさえずる



キビタキ (ヒタキ科)
湯川・湯ノ湖に沿った林をすみかとし、ポ
イビリ、ピピロピピロとよい声でさえず
る。夏、日本にわたってくる



ノビタキ (ツグミ科)
戦場ヶ原・小田代原の代表種。ホザキシ
モツケの頂などでフィフィチョ、チョリリと
さえずる。夏、日本にわたってくる



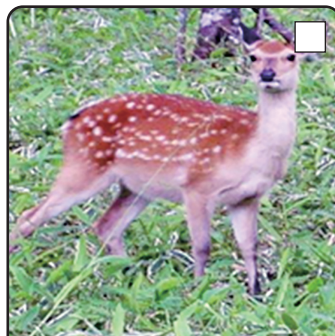
オオジシギ (シギ科)
別名カミナリシギ。羽音と鳴き声がすさ
ましく、戦場ヶ原の上空を飛び様子に驚
かされる。夏、日本にわたってくる



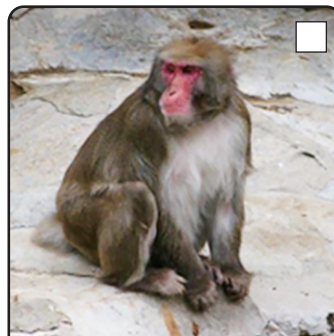
ホトトギス (カッコウ科)
樹上でごし、ウグイスの巣に卵を産み
育ててもらう。キョッキョツ、キョッキョツ
キョツと鳴く。夏、日本にわたってくる

湯ノ湖・戦場ヶ原・小田代原に見られるほ乳類・昆虫

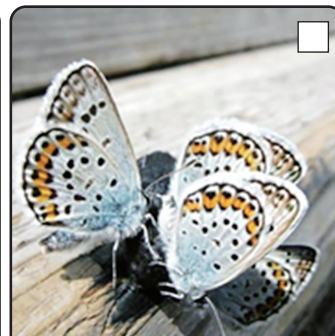
MEMO



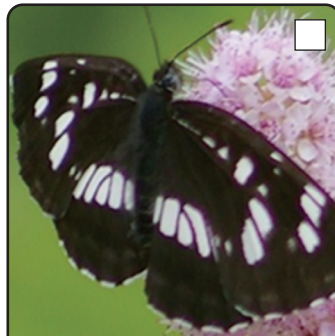
ニホンジカ (シカ科)
大型の草食動物。奥日光では数が増え
すぎ問題になっている。そのためシカ柵
や木にネットをまいて食害を防いでいる



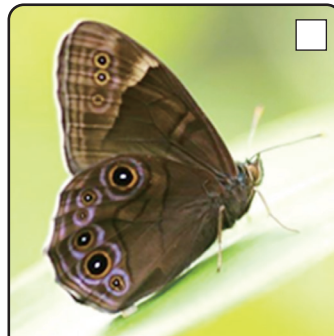
ニホンザル (オナガザル科)
ラムサール条約指定地を含む奥日光の
ほ乳類の代表種。数が増えすぎ、人への
被害がでている



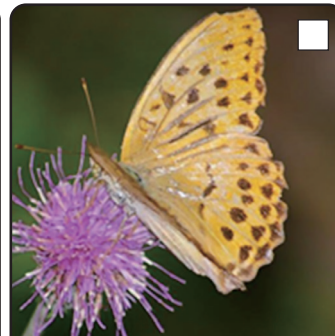
ヒメシジミ (シジミチョウ科)
戦場ヶ原や小田代原にたくさん見られ
る。幼虫の食草がキクやタデ、マメの仲
間など幅広いので数が多い



フタスジチョウ (タテハチョウ科)
戦場ヶ原や小田代原のホザキシモツケが
幼虫の食草。ホザキシモツケやウガイソ
ウなど花の蜜を吸うほか、水飲みにくる



クロヒカゲ (タテハチョウ科)
湯ノ湖や湯川沿いの木陰で見られる。
樹液や動物のふんにくるほか、水飲みに
くる。幼虫の食草はササの仲間



ミドリヒョウモン (タテハチョウ科)
幼虫はスミレ類を食草として、平地から
山地まで幅広くすみ。アザミの花の蜜を
吸いにくる



アサギマダラ (タテハチョウ科)
日本全国を旅するので知られ、親チョウ
が夏場に奥日光一帯にわたってくる。幼
虫の食草はイケマ



エゾハルゼミ (セミ科)
初夏に成虫となり、明るい日差しのもと、
高い木の中段で大合唱をする。
鳴き声はミョーキン、ケケケケ



アキアカネ (トンボ科)
低地で成虫になり、夏の間は涼しい高原
や高山などです。秋に再び低地にも
どり水田や池などに卵を産む

しら ～調べてみよう～

ラムサール条約湿地「奥日光の湿原」^{おくにっこう しつげん}で調べてみたいことを話し合って、出しあってみましょう。

しら ～調べたことをまとめよう～

ラムサール条約湿地「奥日光の湿原」^{おくにっこう しつげん}で気づいたことを、まとめてみましょう。

～例～

- ☐ ハクサンフウロ、ニッコウアザミなど、家のまわりにはない植物、野鳥などが見られた。
- ☐ マガモが泳いでいた。ウグイスのなき声が聞こえた。
- ☐ エゾハルゼミが木にとまってないていた。
- ☐ 草にヒメシジミがとまっていた。

など、みられた植物、野鳥などをハンドブックで調べてまとめてみましょう。

～学習のまとめ～

調べてまとめたことを発表してみましょう。

写真

写真

[参考]

～ラムサール条約湿地に関すること～

環境省自然環境局野生生物課 <http://www.env.go.jp/nature/ramsar/conv/>

ラムサール条約登録湿地関係市町村会議 <http://www.ramsarsite.jp/>

～ラムサール条約湿地「奥日光の湿原」に関すること～

日光市産業環境部環境課

<https://www.city.nikko.lg.jp/kankyou/kankou/ramsar/>

栃木県環境森林部自然環境課

<http://www.pref.tochigi.lg.jp/d04/eco/shizenkankyou/shizen/ramsar.html>

～奥日光に関すること～

環境省日光国立公園日光湯元ビジターセンター <http://www.nikkoyumoto-vc.com/>

栃木県立日光自然博物館 <http://www.nikko-nsm.co.jp/>

奥日光清流清湖保全協議会 <http://www1a.biglobe.ne.jp/okunikko-seiryuseiko/>

～観光に関すること～

日光市の観光（日光市ホームページ）

<https://www.city.nikko.lg.jp/kanko/index.html>

一般社団法人 日光市観光協会 <http://www.nikko-kankou.org/>

[協力者]

作新学院大学女子短期大学部教授 青木章彦

日光市環境学習センター自然解説員 名塚史雄、武井宏之、駒倉政夫、吉原博司、

環境省自然公園指導員 山崎晃、安倍輝行、元小学校長 八木沢 亨、平家の里

環境省関東地方環境事務所日光自然環境事務所、日光市教育委員会、日光市観光部

（順不同・敬称略）

[出典]

八木沢亨著「子どものための日光のむかしばなし」（1987年（昭和62年）3月発行）

日光市教育委員会 社会科副読本「わたしたちの日光市」

■ 発 行 / 日光市

〒321-1292 日光市今市本町1番地

TEL0288-21-5152 FAX0288-21-5128

<http://www.city.nikko.lg.jp>

■ 編 集 / 日光市市民環境部環境課

■ 発行日 / 平成28年3月

